水産研究・教育機構 機関リポジトリ
FRA Japan Fisheries Research and Education Agency Institutional Repository

カンパチ種苗の国産化及び低コスト・低環境負荷型養殖技術の開発

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010140

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

カンパチ種苗の国産化及び低コスト・低環境負荷型養殖技術の開発

養殖研究所（栽培技術開発センター・生産技術部・生産システム部）
共同研究機関：東北区水産研究所，水産工学研究所，西海区水産研究所，
志布志栽培漁業センター，五島栽培漁業センター，東京大学，
東京海洋大学，長崎大学，鹿児島県水産技術開発センター，
財団法人宮崎県水産振興協会，日本水産株式会社大分海洋研究センター

研究の背景・目的

わが国のカンパチ養殖業での養殖用種苗は，ほぼ100％を中国産の天然種苗に依存しています。このような状況下，中国で中間育成された輸入種苗に人魚共通病原体であるアニサキスの寄生が確認されました。このことは，国民へのカンパチ養殖の不信感を急速に広め，カンパチ養殖魚の信頼性が著しく損なわれる事態となりました。この問題の抜本的解決を図るため，一刻も早くカンパチの養殖用種苗を国内産人工種苗で賄う必要があります。

本プロジェクトではカンパチ養殖用種苗を低コストの国内産人工種苗に置き換えるための基盤技術を開発するとともに，実際の養殖業に貢献できる有用な技術開発を目的としました。

研究成果

養殖研栽培技術開発センターでは，カンパチ親魚の飼育環境条件の制御により３年連続して，通常の産卵期である５～７月から12月に産卵期を早めることに成功し，早期採卵技術を確かなものにしました。種苗生産技術においても，適正飼育環境と適正餌料系列を明らかにするなどの着実な進歩により，通常期の最高生残率14.3％，単位生産尾数は967尾／kℓを達成しました。また，種苗の選別により飼育中期以降の生産率が大幅に向上しました。養殖試験では，12月の早期種苗は，養殖場導入時期には中国産天然種苗よりもサイズが大きいため，イリドウイルス発生期以前にワクチン接種が可能になる疾病対策上の優位性に加え，出荷サイズに早く到達する（図１）という有効性が実証されました。

波及効果

生産履歴が明らかな人工種苗でカンパチ養殖種苗を賄う大量生産への基盤が構築されるとともに，低コストの種苗を用いて従来の養殖期間よりも短期間で出荷可能な養殖技術が確立されます。これにより，養殖に関わるコストの大幅な削減が可能になるとともに，自発摂餌リズムを考慮した新型の給餌技術の開発により，低環境負荷型の養殖技術の実現が期待されます。

図１．12月採卵由来の人工種苗（上：体重2.6kg）と中国産天然種苗（下：2008年４月に養殖業者が輸入し８カ月養殖した種苗，1.2kg）（2009年１月撮影）